

Confirmatory Factor Analysis and Basic Investigations of Old-Fashioned and Modern Racism Scales against Zainichi Koreans

TAKA, Fumiaki

Keywords: Ethnic Prejudice, Old-Fashioned Racism, Modern Racism, Symbolic Racism

Abstract

Taka & Amemiya (2013) has revealed that, in agreement with previous theoretical framework, racism against Zainichi Koreans (Korean residents in Japan) can be separated into two distinct types: blatant Old-Fashioned Racism (McConahay, 1986) wherein minorities are regarded as being inferior and undesirable, and Modern Racism (McConahay, 1986), or Symbolic Racism (Sears, 1988), in which the biased beliefs against minorities are covert and subtle. In order to establish valid and reliable scales for measuring the two types of racism, we conducted a confirmatory factor analysis with a relatively large sample of university students. The results showed that our two-factor model outperformed one-factor models. We further identified that the Old-Fashioned Racism Scale consisted of 6 items whereas the Modern Racism Scale consisted of 4 items. Using these scales, we carried out a series of test to clarify how they are linked to the feeling thermometer, gender, and age.

在日コリアンに対する 古典的／現代的レイシズム尺度の 確認的因子分析と基礎的な検討ⁱ⁾ⁱⁱ⁾

高 史 明

要約

高・雨宮（2013）は、マイノリティが劣っているとみなす露骨な偏見である古典的レイシズム（Old-Fashioned racism）と、より隠微な偏見である現代的レイシズム（Modern Racism; McConahay, 1986）ないし象徴的レイシズム（Symbolic Racism; Sears, 1988）が、在日コリアンに対する偏見においても区別可能であることを示した。本研究は、高・雨宮（2013）の古典的レイシズム尺度と現代的レイシズム尺度を用い、比較的大きな大学生サンプルについて確認的因子分析を行い、今後の研究に使用出来る尺度を確立することを目的とした。分析の結果、二因子モデルは一因子モデルより優れていることが示された。最終的に古典的レイシズムは6項目、現代的レイシズムは4項目からなる尺度を得るこ

i) 本研究に用いたサンプルの一部は、以下の研究で発表されたものである。高（2011）、高・雨宮（2009, 2010, 2011a, 2011b, 2013）。

ii) 研究に協力してくださった現東京女学館大学の雨宮有里先生、神奈川大学の杉本崇先生、現帝京学園短期大学の森田麻登先生、およびアブストラクトの校正を行なってくださった東京大学大学院の Lee Sean 氏に御礼申し上げます。

とができた。これらの尺度を用いて、感情温度計との相関、年齢との関係、男女差を検討した。

目的

本研究の目的は、在日コリアンⁱⁱⁱ⁾に対する偏見として高・雨宮(2013)が指摘した古典的レイシズムと現代的レイシズム^{iv)}について、比較的大きなサンプルを用いて確認的因子分析を行い、今後の研究で用いることのできる尺度を確立することである。

高・雨宮(2013)は、米国における黒人に対する偏見の研究(e.g., McConahay, 1986)を参考に、日本における在日コリアンに対する偏見についても、古典的レイシズム(Old-Fashioned Racism)と現代的レイシズム(Modern Racism)の区別が可能であることを指摘した。古典的レイシズムとは、対象となるマイノリティはマジョリティよりも劣っているという信念に基づく、公然とした偏見である。これに対して現代的レイシズムとは、(1)対象となるマイノリティへの差別は既に存在しておらず、(2)現に存在する格差は偏見・差別に基づく不平等によるものではなくマイノリティの努力の欠如によるものであり、(3)にもかかわらずマイノリティは政府による優遇を過剰に求め、(4)不当な経済

iii) 在日朝鮮人という語は、朝鮮籍者(いわゆる“北朝鮮人”を指す場合もあるが、必ずしも同一ではない)のみを指す語として用いられる場合と、朝鮮籍者・韓国籍者の総称として用いられる場合がある。そこで本論文では、両者を総称する際には、在日コリアンという語を用いることとした。ただし在日コリアンという用語はあまり一般的ではないため、質問紙においては用いていない。

iv) 人種と民族とは、生物学的背景の有無によって、異なる概念として定義されることもある。しかしながら、この区別は人種間の差異も生物学的差異をほとんど欠いているという科学的知見から考えても、一般人の理解という素人理論の面から考えても、必ずしも有益ではない(Zárate, 2008)。そこで本研究では、人種偏見と民族偏見とを総称する語として、“レイシズム”の語を用いることとした。この用法は、人種差別撤廃条約などにおいて人種差別(racial discrimination)の語が人種のみならず民族に基づくものも指すという用法とも一致している。

的恩恵を受けているとする、より微妙な偏見である。現代的レイシズムは元々は米国において、ナチスの人種政策への反省と公民権運動の進展とによりレイシズムは好ましくないという認識が共有されるようになったという背景を受けて、古典的レイシズムに代わって現れた黒人への偏見として研究対象になったものである。これらの研究には、McConahay らの一連の研究がある (e.g., McConahay, 1983, 1986) ほか、Sears らも象徴的レイシズム (Symbolic Racism) の名称を用いて、ほぼ同様の概念について検討を行ってきた (e.g., Sears, 1988; Sears & Henry, 2003; Sears & Jessor, 1996; Tarman & Sears, 2008)。近年では、実験においても現代的レイシズムを測定することが一般的である (e.g., Wittenbrink, Judd, & Park, 1997)。この様に現代的レイシズムの概念は本来日本における在日コリアンに対する偏見の文脈で発展してきたものではないのだが、近年インターネット上で“在日特権”なるものが盛んに語られ (see 高, 2012)、“在日特権”の廃止をその名称やスローガンに掲げるヘイト・グループ (“在日特権を許さない市民の会” など) が一定の支持を集める現代日本においても、この偏見を古典的レイシズムと区別して検討する意義は大きいだろう。実際、高・雨宮 (2013) は探索的因子分析により、在日コリアンに対する偏見においても古典的レイシズムと現代的レイシズムとが分化していることを示し、また、古典的レイシズムと現代的レイシズムとが、在日コリアンの社会的役割 (職業等) の予測に対して理論的に予測される効果を持つことを示している。すなわち、古典的レイシズムは日本における法律家と医者などの在日コリアンの割合の予測に負の効果を持つ一方で、同じく“ヤクザ”における割合の予測には正の効果を持った。つまり、古典的レイシズムが強いほど、在日コリアンの知的能力と道徳性を低く見積もったことになる。一方で、現代的レイシズムはステレオタイプのな経済的成功者である焼

肉店経営者とパチンコ店経営者および生活保護受給者における在日コリアンの割合の予測に対して、正の効果を持った。つまり、現代的レイシズムが強いほど、在日は経済的に不遇ではなく、また社会保障の恩恵も受けていると考えていることになる（高・雨宮，2013）。

これまでに高と雨宮は、McConahay（1986）の古典的レイシズム尺度および現代的レイシズム尺度を高・雨宮（2009）が訳したものをを用いて、様々な検討を行なってきた（高，2011；高・雨宮，2011a, 2011b, 2013）。これらの研究では、研究毎に両尺度についての探索的因子分析を行い、使用する項目を決定してきた。しかしながら、より多くの研究に活用するという目的に鑑みたときには、使用する項目は予め決定されていることが望ましい。そこで本研究では、過去に発表された研究（高，2011；高・雨宮，2011a, 2011b, 2013）に用いられたサンプルを含む比較的大きなサンプルを用いて、在日コリアンに対する古典的レイシズム尺度と現代的レイシズム尺度を確立することを目的とする。

方法

2008年10月から2011年1月にかけて、関東地方の5つの大学の10個のサンプルの大学生に対して、心理学の講義時間中に質問紙調査を実施した。学生サンプルに限ったのは、在日コリアンに対する偏見のようなセンシティブな問題を扱った場合、一般サンプルでは回収率が極端に低くなることが懸念されたため、自発的な協力の得やすい大学生サンプルを用いることが適当と考えられたからである（本研究の質問紙調査は、参加は強制ではなく協力しなかった場合にも不利益は生じないこと、回答中いつでも回答を放棄できることを予め教示した上で実施された）。各サンプルの参加者数の内訳と性質は表1に示した。サンプル6～8の

みは2回の調査結果を照合するために回答者自身が生成したIDを記入したが、このサンプルも含む全てのサンプルの回答者は、匿名で回答を行った。サンプル3、6では、協力への謝礼として授業成績への加点が行われたが、そのための署名用紙は質問紙本体とは別に回収された。回答者は合計で1,358名であり、このうち国籍が日本であると回答し、レイシズム尺度に欠損値の無かった回答者数は、1,274名であった。うち774名が男性、495名が女性であり、無回答者は5名であった。また、平均年齢は19.2歳（SD=1.47）であった。

それぞれのサンプルは様々な調査目的のために異なる質問紙に回答し

表1：各サンプルの主要情報

サンプル	都道府県	実施時期	調査全体の所要時間	匿名性	報酬	回答者数	有効回答者数	有効回答の平均年齢
1	神奈川県	2008年10月	約15分	完全に匿名	なし	173	167	19.3 (1.16)
2	神奈川県	2009年5月	約10分	完全に匿名	なし	176	161	18.8 (1.19)
3	神奈川県	2009年5月	約10分	完全に匿名	成績評価への加点	21	20	20.5 (1.10)
4	埼玉県	2009年6月	約10分	完全に匿名	なし	35	29	19.2 (0.41)
5	東京都	2009年7月	約10分	完全に匿名	なし	4	4	19.5 (0.58)
6	東京都	2010年5月	約30分	自己生成のIDを記入	成績評価への加点	206	198	18.4 (.967)
7	神奈川県	2010年6月	約10分	自己生成のIDを記入	なし	337	323	18.9 (1.16)
8	千葉県	2010年12月	約30分	自己生成のIDを記入	なし	149	136	20.4 (1.54)
9	埼玉県	2011年1月	約30分	完全に匿名	なし	135	126	19.7 (1.65)
10	埼玉県	2011年1月	約30分	完全に匿名	なし	122	110	19.7 (2.22)
計						1358	1274	19.2 (1.47)

たが、いずれの質問紙調査も、一般的な大学生の意見を調べるための調査であると説明した上で行われた（研究の真の目的の説明は回答終了後に行われた）。また、全ての調査は、最初の設問で古典的レイシズム尺度と現代的レイシズム尺度の日本語訳各7項目（高・雨宮，2013）に回答し、続く設問で在日コリアンに対する感情温度計に回答したという点は、共通していた。各サンプルには質問紙の分量や報酬などの面で異同があるが、これらはレイシズム尺度の構造を変化させるようなものとは考えにくく、また古典的／現代的レイシズム尺度を様々な質問紙の一部として実施できるように最大公約数としての尺度を得るという目的を鑑みたときには、この点は本研究の欠点とは言えないだろう。

古典的レイシズム尺度および現代的レイシズム尺度は、“在日朝鮮人・韓国人（以下“在日朝鮮人”と表記）についての意見が、14個印刷されています。提示された意見が自分の意見にどのぐらい合致するか、該当する数字に○をつけて回答してください。”という質問を用いてなされた。ただしサンプル2以降では、“在日北朝鮮人・韓国人（以下“在日朝鮮人”と表記）”という表記が用いられた^{v)}。古典的レイシズム尺度の項目と現代的レイシズム尺度の項目は交互に配され、回答者は各項目にどの程度賛同するかを7件法で回答した。

続く感情温度計に用いられた質問は、“在日朝鮮人・韓国人に対するあなたの感情を温度計で表すと、どのようになりますか？目盛りが指すと思われる位置に縦線を引いてください。”というものであった^{vi)}。回答者は、左端に“好ましくない／つめたい”、右端に“好ましい／あた

v) 日本においては、“北朝鮮”国籍者は存在せず、地域を指す“朝鮮”籍と国籍である“韓国”籍が混在している。そこでサンプル1では“朝鮮籍者”を指す語として“朝鮮人”という表記を用いたのだが、一般的な回答者の理解に合わせ直感的に理解しやすいようにするために、サンプル2以降では“北朝鮮人”の表記を用いた。したがってこの用語は不正確な用語であるのだが、質問紙に用いているものであるため、修正せずに引用した。

vi) この質問においても、サンプル2以降では“在日北朝鮮人・韓国人”が用いられた。

たかい”というラベルが振られた温度計を模した 100 mm の図に、線分を書き入れた。この図において、左端から解答者が書き込んだ線分までの距離を測定し、感情温度計の得点（0～100）とした。この感情温度計は、特定の信念（ステレオタイプ）を強く反映する古典的レイシズムや現代的レイシズムに比べて、より純粋な好き／嫌いの態度を測定する指標として用いられているものであり（e.g., Sears & Henry, 2003）、本研究では古典的レイシズムと現代的レイシズムのどちらがより感情的でどちらがより認知的なのかを検討するために用いられた。

また、年齢、性別（男／女）、国籍（“日本人”を含む選択式）を、各質問紙の最後で問うた。

結果

McConahay（1986）にもとづき、古典的レイシズムと現代的レイシズムの二因子がそれぞれ 7 項目に負荷するという構造を仮定し、確認的因子分析を行った。分析には AMOS18.0（SPSS Inc.）を用い、最尤法を用いて分析を行った。レイシズム因子からの予測された効果が有意でなかった 2 項目を削除したところ、採択可能なモデルが得られた（ $\chi^2(53) = 308.4, p < .001, GFI = .958, AGFI = .939, RMSEA = .062, AIC = 358.431, BIC = 487.178$; χ^2 検定の結果は有意であるが、一般に χ^2 検定ではサンプルサイズが 1000 件程度を超えると僅かな差でも有意になりやすく、モデルの検討には向かないため、他の適合度指標を参照した）。しかし、誤差項間の共変動を認めたところ、各適合度指標に大幅な改善が見られた（ $\chi^2(33) = 27.3, p = .74, GFI = .996, AGFI = .992, RMSEA = .000, AIC = 117.34, BIC = 349.09$ ）。このため、共変動を投入したモデルを採択する。

二つの因子の間には、先行研究（e.g., McConahay, 1986; 高・雨宮, 2013）と同様に比較的強い相関が認められた（ $r = .73$ ）。そこで、二因子モデルで最終的に用いられた項目全てに単一の因子が負荷する一因子構造モデルについても分析を行い、比較することとした。一因子モデルの場合にも、誤差項間の共変動を投入しなくても、採択可能なモデルを得ることができた（ $\chi^2(54) = 469.6, p < .001, GFI = .937, AGFI = .909, RMSEA = .078, AIC = 517.58, BIC = 641.08$ ）。しかし、誤差項間の共変動を認めたところ、各適合度指標に大幅な改善が見られた（ $\chi^2(30) = 24.0, p = .77, GFI = .997, AGFI = .992, RMSEA = .000, AIC = 119.34, BIC = 367.17$ ）。

各モデルの適合度については、表 2 に示す。共変動を投入しない場合にも投入した場合にも、AIC と BIC の両指標で、二因子モデルの方が優れたモデルであることが示された。そこで、二因子モデル（共変動投入）を最終的に採択するモデルとする。

表 2：各モデルにおける適合度指標

	自由度	χ^2	p	GFI	AGFI	RMSEA	AIC	BIC
二因子モデル	53	308.4	<.001	.958	.939	.062	358.43	487.18
二因子モデル (共変動投入)	33	27.3	.74	.996	.992	.000	117.34	349.09
一因子モデル	54	469.6	<.001	.937	.909	.078	517.58	641.18
一因子モデル (共変動投入)	30	24.0	.77	.997	.992	.000	119.98	367.17

この二因子モデル（共変動投入）における各因子から各項目へのパス係数を、表 3 に示す。

2つの因子が先行研究と同一の項目に負荷したのは、各 6 項目ずつの 12 項目である。しかし、現代的レイシズム尺度のうち 2 項目に関しては現代的レイシズム因子からのパス係数が小さいため、実際に尺度を使

表 3：二因子モデル（共分散投入）における各因子から各項目へのパス係数

項目番号・項目	第 1 因子 (古典的レイシズム)	第二因子 (現代的レイシズム)
O7：日本国内で日本人と在日朝鮮人との法的平等を認めようとするのは、間違いだ	.74	—
O4：在日朝鮮人の居住の自由を認める法には、反対だ	.73	—
O5：在日朝鮮人と日本人が結婚するのは、不幸なことだ	.56	—
O6：在日朝鮮人に隣に住まれると、自分と同程度の収入・学歴があったとしても、かなり気にかかる	.51	—
O1：在日朝鮮人は、一般的に日本人ほど知的能力に優れていない	.45	—
O2：持ち主が在日朝鮮人には家屋を提供したいと思ってないときでも在日朝鮮人が家屋を借りたり買ったり出来るようにするための法には、賛成である (R)	.42	—
M4：在日朝鮮人は、平等の名の下に過剰な要求をしている	—	.81
M6：在日朝鮮人達はすでに、不当に高い経済的地位を得ている	—	.68
M3：在日朝鮮人は、教育における差別の解消を求めると称して、不当に強い要求をしてきた	—	.55
M7：政府やマスコミは在日朝鮮人に対して過度な配慮をしている	—	.50
M1：在日朝鮮人に対する差別は、もはやたいした問題ではない	—	.33
M2：在日朝鮮人が現状を不満に思うのももっともだ (R)	—	.32
O3：一般的に言って、異民族・人種の完全な統合が望ましい。(R)	—	—
M5：在日朝鮮人は、その場に自分がふさわしいか配慮して控えめに振舞うべきだ	—	—
第一因子との相関	—	.73

各項目冒頭の略号は、O（古典的レイシズム尺度）、M（現代的レイシズム尺度）、および項目の順。

文末の略号 (R) は逆転項目。

用するときにはこれらを除外することが望ましい。したがって、最終的に尺度に含まれる項目数は、古典的レイシズム 6 項目、現代的レイシズム 4 項目となる。

次に、サンプルサイズが 100 を超えるサンプルについて、これらの項目を用いたクロンバックの α 係数を、表 4 に示した。サンプル 9 において古典的レイシズムの信頼性が低かった他は、いずれのサンプルでも、実用に耐えうる値を示している。

表 4：各サンプルにおけるクロンバックの α

	総合 (サンプル 3~5 を含む)							
	1	2	6	7	8	9	10	
サンプルサイズ	167	161	198	323	136	126	110	1274
古典的レイシズム	.81	.78	.69	.75	.82	.59	.73	.76
現代的レイシズム	.69	.67	.72	.69	.76	.67	.76	.71

これらの項目を用いて、その平均値を各回答者の古典的レイシズム得点、現代的レイシズム得点とした。古典的レイシズム得点では $M = 2.97$, $SD = 1.12$ となり、現代的レイシズム得点では $M = 3.70$, $SD = 1.04$ となった。両得点間の差は有意であり ($t(1273) = 25.48$, $p < .001$)、現代的レイシズムの方が得点が高かった。両尺度は、中程度 ($r = .56$) の相関を示した。

また、感情温度計との相関は、古典的レイシズムでは $r = -.60$ 、現代的レイシズムでは $r = -.43$ であった。比較すると古典的レイシズムの方が感情温度計との相関は強かった ($t(1271) = 8.09$, $p < .001$)。

性差に関しては、古典的レイシズムでは男性 $M = 3.14$, $SD = 1.18$ に対して女性 $M = 2.70$, $SD = .94$ であった。等分散性のための Levene の検定が有意だったため ($F(1,1267) = 16.38$, $p < .001$)、等分散性を仮定しない t 検定を行ったところ、男性の方が有意に高かった (t

(1204.39) = 7.44, $p < .001$)。また現代的レイシズムでは男性 $M = 3.82$, $SD = 1.09$ に対して女性 $M = 3.49$, $SD = 0.90$ であった。等分散性のための Levene の検定が有意だったため ($F(1,1267) = 6.35$, $p < .05$)、当分散性を仮定しない t 検定を行ったところ、やはり男性の方が高かった ($t(1185.29) = 5.81$, $p < .001$)。感情温度計では、男性 $M = 48.85$, $SD = 23.04$ に対して女性 $M = 56.30$, $SD = 19.43$ であった。やはり等分散性のための Levene の検定が有意だったため ($F(1,1257) = 13.02$, $p < .001$)、等分散性を仮定しない t 検定を行ったところ、女性の方が有意に好意的であった ($t(1165.25) = 6.17$, $p < .001$)。したがって、全ての指標において男性の方がレイシズムが強く、また分散も大きいという結果が得られた。性別毎の古典的レイシズム／現代的レイシズム得点および感情温度計得点の平均値および SD は、表 5 に示した。

表 5：男女別・レイシズムの各指標の平均値および SD

	古典的レイシズム	現代的レイシズム	感情温度計
男	3.14 (1.18)	3.82 (1.09)	48.85 (23.04)
女	2.70 (.94)	3.49 (.90)	56.30 (19.43)

*全ての指標において、男女差は $p < .001$ で有意

また本研究は大学生サンプルに限定したものであり、年齢の分散は小さく、平均値も若者に偏ったものではあるが、年齢との相関も検討した。古典的レイシズムでは $r = .05$, $p = .11$ 、現代的レイシズムでは $r = .07$, $p < .05$ 、感情温度計では $r = -.06$, $p < .05$ と、現代的レイシズムと感情温度計の 2 つの指標において、弱いながらも年齢が高いほどレイシズムが強いという結果が得られた。ただし散布図を検討したところ、現代的レイシズムでは、サンプルのごく一部に過ぎない 25 歳を超える回答者で、特に線形性が強いように見受けられた。そこで 25 歳以下の回答者に限定して、再度分析を行った。その結果、古典的レイシズムでは r

= .05, $p = .08$ であり、現代的レイシズムでは $r = .06$, $p < .05$ であり、感情温度計では $r = -.06$, $p < .05$ であった。したがって、25 歳以下の回答者に限定した場合でも、そうした制約を行わなかったときと同様、年齢が高いほど現代的レイシズムと感情温度計の 2 つの指標において、レイシズムが強いという結果が得られた。

考察

本研究では、複数の大学で得たサンプルを合算し、比較的大きなサンプルを用いて、在日コリアンに対する古典的レイシズムと現代的レイシズム（高・雨宮，2013）について、確認的因子分析を行った。その結果、先行研究（e.g., McConahay, 1986; 高・雨宮，2013）と同様の二因子モデルの妥当性が確認され、また今後の研究に用いることのできる古典的レイシズム尺度 6 項目と現代的レイシズム尺度 4 項目を選定することができた。ただし、現代的レイシズム尺度について、項目 1 “在日朝鮮人に対する差別は、もはや大した問題ではない” および項目 2 “在日朝鮮人が現状を不満に思うのはもっともだ” の因子負荷量は比較的小さく、負荷量の大きかった項目はいずれも在日コリアンの要求や地位を過剰なものとするものであったことを考えると、在日コリアンに対する現代的レイシズムにおいては黒人に対するものの場合に比べて、差別が既に存在しないという認知の比重は小さく、差別が現存すること自体は強くは否認しないながらも、在日コリアンの権利への要求は過剰なものとして退けるといえるものであるのかもしれない。

以下の検討は、こうして得られた 2 つの尺度および、並行して得た感情温度計についてのものである。

古典的レイシズム尺度得点と現代的レイシズム尺度得点を比較すると、

古典的レイシズム尺度得点の方が高かった。この結果は高・雨宮(2013)とも一貫している。これは、現代的レイシズムのほうが受容ないし表出が容易であることを示唆している。しかしながら現代的レイシズムは古典的レイシズム以上に人種間の平等を目指す政策への否定的態度を予測するものであることが、米国での黒人に対する偏見についての研究では示されている (e.g., Sears, 1988; Sears & Jessor, 1996;)。日本においても同様の知見が得られるのかは、今後検討されるべき課題である。また、高・雨宮, (2011b) はインターネットの使用時間が長いほど現代的レイシズムが強まるが古典的レイシズムは強まらないことを示しているが、このように環境や経験によって左右されやすいのが現代的レイシズムであることも考えると、この偏見が政策決定などに及ぼす影響の検証には十分な努力がなされるべきである。

古典的レイシズムも現代的レイシズムも、感情温度計との間に中程度の相関を示した。したがって、両尺度の併存的妥当性が示されたと言える。また、古典的レイシズムのほうが現代的レイシズムに比べて感情温度計との相関が強かったことから、古典的レイシズムの方が感情の要素が強く、現代的レイシズムの方が認知的であるという先行研究の仮説 (e.g., McConahay, 1986; 高・雨宮, 2013) は、ここでも確かめられた。

性差に関しては、いずれの指標でも女性のほうがレイシズムが弱かった。これは、Johnson & Marini (1998)、Sidanius, Pratto, & Bobo (1994)、高・雨宮 (2011b) などの先行研究とも一致している。理由としては、社会における不平等を容認する保守的イデオロギーである社会支配指向 (Pratto, Sidanius, Stallworth, & Malle, 1994) が女性の方が低いこと (Pratto et al., 1994; Sidanius et al., 1994; 高・雨宮, 2011b) や、女性はレイシズムと類似した内容のセクシズムの対象となる (Swim, Aikin, Hall, & Hunter, 1995) ために在日コリアンに共感しやすいことなどが

考えられる。分散に関しても、男性の方が女性よりも大きかった。これにはレイシズムの規定要因である価値観・イデオロギーである右翼権威主義 (Altemeyer, 1996)、社会支配指向 (Pratto et al., 1994)、プロテストント的労働倫理、人道主義—平等主義 (Katz & Hass, 1988; 高・雨宮, 2013) などの個人差が男性において大きい可能性 (ただし、高・雨宮, 2013 のデータを再分析したところ、プロテストント的労働倫理と人道主義—平等主義の分散の大きさに男女差は見いだせなかった) や、在日コリアンとの直接的ないし間接的な接触経験 (Allport, 1954/1979; Pettigrew & Tropp, 2006; 高, 2011; Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, & Ropp, 1997) の頻度や効果の男女差によるなどの理由が考えられる。この点は今後の検討課題である。

年齢の効果は、大学生に限定したサンプルにもかかわらず、現代的レイシズムと感情温度計については、有意であった。これは、18 歳から 25 歳までの回答者に限定した場合でも同じ結果が得られた。一般に教育歴はレイシズムに対して負の効果を示すのに対して年齢は正の効果を示す (e.g., Pettigrew & Meertens, 1995) のだが、サンプルを大学生に限った場合には、年齢が高い回答者のほうが大学での教育歴が長いであろうことの効果よりも、加齢の直接の効果の方が強いことになる。これが加齢そのものによる効果なのか、より高齢で大学に在籍することに繋がるような何らかのパーソナリティや人口統計学的要因の影響によるものかは、検討の必要があるだろう。

以上、本研究では今後の研究に用いることのできる古典的レイシズム尺度と現代的レイシズム尺度を得ることができた。また、それらを用いて幾つかの要因との関係を検討した。今後これらの尺度が様々な研究に用いられ、在日コリアンに対する偏見の規定因や動態の解明に貢献することを期待したい。

引用文献

- Allport, G. W. (1954/1979). *The nature of prejudice* (25th Anniversary ed.). Cambridge, Massachusetts: Perseus Books.
- Altemeyer, B. (1996). *The Authoritarian Spector*. Cambridge: Harvard University Press.
- Johnson, M. K., & Marini, M. M. (1998). Bridging the Racial Divide in the United States: The Effect of Gender. *Social Psychology Quarterly*, **61** (3), 247. doi:10.2307/2787111
- Katz, I., & Hass, R. G. (1988). Racial ambivalence and American value conflict: Correlational and priming studies of dual cognitive structures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55** (6), 893-905. doi:10.1037//0022-3514.55.6.893
- McConahay, J. B. (1983). Modern Racism and Modern Discrimination: The Effects of Race, Racial Attitudes, and Context on Simulated Hiring Decisions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9** (4), 551-558. doi:10.1177/0146167283094004
- McConahay, J. B. (1986). Modern racism, ambivalence, and the modern racism scale. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner (Eds.), *Prejudice, Discrimination, and Racism* (pp. 91-125). Orlando, FL: Academic Press.
- Pettigrew, T. F., & Meertens, R. (1995). Subtle and blatant prejudice in Western Europe. *European Journal of Social Psychology*, **25**, 57-75.
- Pettigrew, T. F., & Tropp, L. R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of personality and social psychology*, **90** (5), 751-83. doi:10.1037/0022-3514.90.5.751
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67** (4), 741-763. doi:10.1037/0022-3514.67.4.741
- Sears, D. O. (1988). Symbolic racism. In P. A. Katz & D. A. Taylor (Eds.), *Eliminating racism: Profiles in controversy* (pp. 53-84). Plenum Press: New York & London.
- Sears, D. O., & Henry, P. J. (2003). The origins of symbolic racism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85** (2), 259-275. doi:10.1037/0022-3514.85.2.259
- Sears, D. O., & Jessor, T. (1996). Whites' racial policy attitudes: The role of white racism. *Social Science Quarterly*, **77** (4), 751-759.
- Sidanius, J., Pratto, F., & Bobo, L. (1994). Social dominance orientation and the political psychology of gender: A case of invariance? *Journal of personality and social psychology*,

67 (6), 998-1011.

Swim, J. K., Aikin, K. J., Hall, W. S., & Hunter, B. a. (1995). Sexism and racism: Old-fashioned and modern prejudices. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68** (2), 199-214. doi:10.1037//0022-3514.68.2.199

高史明. (2011). 直接接触・拡張接触による在日コリアンへの偏見の性差. 日本社会心理学会第52回大会発表論文集 (p. 365).

高史明. (2012). Twitterにおけるコリアンについての言説の分析. 日本社会心理学会第53回大会発表論文集 (p. 311).

高史明・雨宮有里. (2009). 在日コリアンに対する古典的人種差別主義・現代的人種差別主義の検討. 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集.

高史明・雨宮有里. (2010). 在日コリアンに対する人種差別主義と多民族統合に対する態度. 日本社会心理学会第51回大会発表論文集.

高史明・雨宮有里. (2011a). 日本人のナショナルアイデンティティと在日コリアンへの偏見. 日本心理学会第75回大会発表論文集 (p. 212).

高史明・雨宮有里. (2011b). インターネットと青年の右傾化：イデオロギーと在日コリアンへの偏見. 日本グループ・ダイナミクス学会第58回大会発表論文集 (pp. 118-119).

高史明・雨宮有里. (2013). 在日コリアンに対する古典的／現代的レイシズムについての基礎的検討. *社会心理学研究*, **28** (2), 67-76.

(Taka, F. & Amemiya, Y. A Basic Investigation of Old-fashioned and Modern Racisms against Zainichi Koreans, *Japanese Journal of Social Psychology*, **28** (2), 67-76.

Tarman, C., & Sears, D. O. (2008). The Conceptualization and Measurement of Symbolic Racism. *The Journal of Politics*, **67** (3), 731-761. doi:10.1111/j.1468-2508.2005.00337.x

Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of personality and social psychology*, **72** (2), 262-74.

Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73** (1), 73-90. doi:10.1037//0022-3514.73.1.73

Zárate, M. A. (2008). Racism in the 21th Century. In T. Nelson (Ed.), *Handbook of Prejudice, Stereotyping, and Discrimination* (pp. 387-406). New York: Psychological Press.